

日本

ハンザキ研 研究所ニュース 2011(1) : 通巻 No. 61



発行2011年1月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

凍 冬

昨夏は猛暑で、この冬は暖冬とかの天気予報が出ていたと思う。しかし、年末からの雪続きのこの1か月であった。何回雪掻きをしたらろうか。人力では対抗しかねる降雪が数回もあって手に入れた小型ユンボが威力を発揮した。雪掻きは面白いが、それが数百メートルに及ぶと腰が痛くなって音を上げてしまう。これが繰り返されるのが雪国の難儀だ。50 ㍎ほど積もった雪を掻き退ける作業だが、玄関先からハンザキ橋を国道まで、そしてオオサンショウウオ保護センターのプールまで、毎日の見回りのルートを確認するのは大変だ。プール周りだけでも 70 ㍎ほどある。握力がなくなると雪掻きのスコップ部に乗せた雪に少しでも偏りがあるとグラリと傾いて雪が落下してしまう。秋に整備した保護センターの作業場の屋根には1 ㍎ほどの雪が乗ったままだ。山の西北にあるから陽がほとんど当たらないので溶けない上に、勾配が小さいので滑り落ちてくれない。軒先がたわんでいる。



雪庇がカーブして上を向くツララ (円内)

それでも降雪のあった朝は楽しみだ。新雪の上を踏みしめて歩く快感や雪上の獣の足跡を追跡してみる楽しみ。コンポストの周辺を掘り返してトンネルを完成させた獣は何物だろうか？ 無人カメラのメモリーを見るのが楽しみになる。そして-12℃になった31日にはトイレが凍結した。洗面所の水道はチョロ水を流しておいたので問題は無かったが、トイレ内の配管が凍り付いてしまったため、ドライヤーで30分ほど暖めて復旧させた。屋外の仮設トイレは水タンクも便器内も凍結で使用不能となった。軒先に百数十本のツララが1~2 ㍎の長さでぶら下がっていい眺めになる。しかし、ツララは雪庇のカーブによって押されて窓ガラスを突き破るそうである(写真参照)。雪掻きだけでなく、ツララ落としもしなくてはならないという。山国の冬は厳しいものだ。



写真1 水面の雪氷に写る夜間照明のカラー



写真2 土手を歩くシカ



写真3 コンポスト盗掘中のテン



写真4 テンが掘り出した穴 (円内)



写真5 出石川の滅失個体 (側面)



写真6 出石川の滅失個体 (正面)

出石川ハンザキの原状復帰その後 ①

兵庫県豊岡市但東町から出石町にかけて流れ円山川に合流する出石川では、平成 16 年の災害から復旧工事が兵庫県豊岡土木事務所の手で 5 年をかけて実施された。大量のハンザキが下流域で発見されたことで、工事に先立っての事前調査で 249 個体が報告された。それも標高数メートルと言う低地の水域で多く見つかったのである。実際に生息する数はこの何倍にも達することであろうし、さらに登録できない 20 センチ以下の幼生たちは無数になるだろう。無論、激流に隠れていた石ごと流されもまれて死亡してしまった個体も多いだろう。

工事区間は出石川の上流区間（但東町）と下流部（出石町）、いくつかの支流をあわせて 30 キロ弱に及んだ。中流部は大きな被害がなく工事は無かった。ハンザキの事前調査や救出作戦は全く経験も生物系のスタッフもいない I 社が落札実施していた。これではいけないと考えて当法人の柿木俊輔理事を送り込んだが、社長交代があって I 社は 1 年でハンザキから撤退してしまった。今後、ハンザキに力を入れてきちんとした実績を出していくと言う約束は反故にされてしまったのだ。そこで大手の E 社に柿木さんを移動させて、この世紀の大事業を後世に残せるように考えたが、柿木さんは宮仕えのように束縛されることが苦痛であったようで、フリーターの道を選んでしまったのも残念なことだ。それでも E 社は彼を現場に投入してくれたのだが、なぜか途中でそれがなくなってしまった。今もってその理由が解明されていないが不可解なできごとだった。次の年には A 社が受託して現在に至っている。

413 個体を救出して 3 年間の飼育を経て、工事が終了した出石川に約 360 個体が原状復帰された。50 個体に及ぶ滅失（死亡や行方不明）が出たが、単独生活者のハンザキを狭い池で長期間飼育することの限界かとも思う。しかし、隔離しなかったら重機の下敷きになり大きな岩でつぶされたりしてもっと多くの個体が死んだかもしれない。その場合には確認できないまま、何事も無かったものとして事は終わっていったのだろう。また、工事を機会にその河川におけるハンザキの生息状況が解明されたことは、今後の保護保全に大いに役立つことと思う。だが、それもきちんとした調査結果を出して残すことが前提になるのだと思う。その意味では、出石川の事例は受託業者が次々と変わってしまったことでその連絡がうまくいったとはいえない状況で、当ニュース No.55 や 56 で加賀見省一さんが報告してくれた個体の追跡がスムーズに行かなかったことでも良く分かる。登録個体番号とマイクロチップ記号がきちんと整理されていれば、すぐに追跡できることなのに、それができない。担当の職員も次々と変わってしまうと、データを探し出すのも大変な作業になるだろう。

個体番号とマイクロチップ記号の混乱は、受託業者からの成果品としての報告書が私の所に届いた時点では手遅れになっていて、正解を要求しても答えが返ってこないということで分からないままになってしまう。県の担当者も人事異動で新しい担当者が着任してくると膨大な報告書から細かな所までのトレースは大きな作業となって、次の業務に支障が

起こりかねない。私の所にも全ての報告書が届けられているのかどうか分からない。とりあえず手元にある分厚い報告書を開いて、読み取ったハンザキのマイクロチップを探すのがなかなか手間暇のかかる作業になってしまう。困ったことだ。

今月になって A 社の追跡調査が行われて死体が運ばれてきた。マイクロチップが挿入されていて個体番号はすぐに分かった。しかし、いつどこでどのサイズで放流（原状復帰）されたのか、その後の追跡調査で確認されたことがあったのかどうか直ぐには分からないという。こんなことでは、今後の追跡調査や、何十年後かに調査をやってくれる人の苦勞がしのばれるので、今の内に出来るだけ明確にしておきたいと考えている。本来ならばこれらの作業は当初柿木さんに任せたことなので、私が手を出すことは無いのだがしかたない。I 社の担当に出石川の登録順の番号を付けることを指示したのだが、毎年の報告書にその個体番号に対応した整理報告がなされていないのが混乱の元なのだ。マイクロチップの一覧表に対応させた個体番号が整理されていけばすぐにトレースができる。

平成 20 年度の 522 番までの一覧表がようやく出来上がったが、その後の追跡調査で新しく登録された個体の整理ができていない。事前調査で 249 個体が登録され、その内の 139 個体は救出され飼育の後に放流された。救出されたのは総計で 413 個体であるので、523 番までが登録個体ということになるが、原簿には 522 番までしかない。1 個体はどうなったのであろうか？ 事前調査の登録個体の内 110 個体は取り上げられずそのまま工事中を川の中で過ごしたことになる。自然の川からすべての個体を取り上げることなど不可能なので、それ以外の個体も含めて多くの個体が工事中の河川で必死に生き延びているのだ。

ところで今回の死体は上顎の表皮が無くなり（写真 5・6）、餌を取ることができなく痩せて死んでしまったようだ。肩甲骨がくっきりと見えるくらいに痩せ細っていた。原因は不明だが、他の個体に咬みつかれての傷が元かもしれないが、このような症状は初めてのことだった。経歴も資料の整理と共にはっきりした。平成 17 年 8 月 11 日に全長 53 ㎝ 体重 810 ㌘ で捕獲された後に、約 3 年間の飼育を経て平成 20 年 5 月 28 日に全長 58 ㎝ 体重 900 ㌘ で原状復帰されたものである。その後 2 年 8 か月後に死体として収容された。全長 59 ㎝ 体重 900 ㌘ である。3 年間の飼育下では順調な成長で全長 +5 ㎝ を示しているが、放流後の 3 年弱では全長が +1 ㎝、体重は変化なしということになる。

自然環境の厳しさを示す結果かもしれないが、体重についてはもっと増えていたのではないかと考えられる。それは、変化なしの重量であっても痩せていたのは、一時的にはあれ放流時から順調に成長していたのがトラブルに遭遇してしまったための餓死と言うことではないかと思う。その上に、尾部左に大きな傷痕が残されている。解剖していないので性別は不明だが、繁殖期におけるオス同士の激しいバトルの結果かもしれない。

とにかく何とか個体の経歴は追跡できたが、あまり労力をかけずに分かるようにしておきたい。今後何十年もの時間をかけた追跡調査をやってくれるであろう人のためにも、今の内にしっかり資料を整理しておきたいと考えて作業しているところである。

雪国の小劇場

① 川の中を歩くシカ

朝起きてハンザキ橋上の門を開けにいくと橋の下からシカの群が驚いて走り出す。山には 50 ㌢～1 ㌢の積雪があつて、さすがの足長シカでも歩けない。彼らは雪の無い川の中や土手を歩き回って餌を探しまわっているのだ (写真 2)。しばらくすると車が走ってきてシカの先回りをする。道路から川の中のシカを挟み撃ちにするのだ。距離も近いし運び出すのは山の中で仕留めた場合に比べたら格段に楽だ。かくして 1 日中パンパンという銃声が川沿いに響く。餌もろくに食えないで餓死する個体もあるだろうが、この大雪で大量の駆除が進んだのではないかと思う。増えすぎて植生を台無しにしてしまうシカたちの存在は厄介だ。作物を一晩で全滅させられたと怒る農家の人、私も校庭に侵入したシカにリンゴなどの苗を食われてしまった。ヒトもそうだが増えすぎるのは不幸であり、適当に“疎”がいいのだが今は過疎化の波が激しすぎる。

② コンポストの盗掘者

テンであった。無人カメラにくっきりと姿を残していた (写真 3)。それにしても数十㌢の積雪の上から、コンポストの裾を囲むブロックの隙間をよくも探し当てるものだと感心してしまう。隙間から周りよりも強い匂いがするのかもしれないが、見事なものだ。穴 (写真 4) に雪を崩して踏み固めておいたら、凍結して掘ることができなくなったようである。ここしばらく音沙汰が無い。

③ 雪上に残された血痕は？

積雪の上に血痕が飛び散っていた。よく見ると動物の足跡が急に U ターンしたりジグザグに続きその周辺に鮮血が雪を染めている。小ネズミがイタチやテンに襲われたのであろうか？ 撮影しておいたが真っ白の雪の上の足跡の撮影は難しい。

④ 小ネズミたちのその後

昨年の 12 月にはアカネズミ 11 個体、ヒメネズミ？ 2 個体を知恵競べの末にゲットした。今月はアカネズミ 3 個体を上旬に捕獲したあと、さっぱり足音もしなくなってしまった。知恵競べにどうやら勝ったようだ。川向こうに放獣した個体は新天地での生活ができているだろうか？ しかし、足音が聞こえてこないのも少々さびしい気がする。さて、いつか帰ってくるのだろうか？

ハンザキ研日誌

2011年1月

- 元日 4年続けての越年である。朝から雪掻きで一汗かいた。
- 3日 コンポスの周囲を掘りまわる物がある。無人カメラセット
- 7日 ・事務局長が朝からコンボで雪掻き
・事務局会議、8名
- 11日 雪中のオオサンショウウオ定期健康診断、8名
- 12日 第3展示室を植物の部屋に模様替え開始
- 16日 雪の重みでアンコ淵の照明が水面から20センチほどに下がり、水面の氷雪が美しいカラーに（写真1）
- 19日 小型除雪機の整備、2年間不使用のため動かず
- 21日 ソフトバンクがケータイ用のアンテナ建設の下見に来所
- 26日 ・1トントラック購入の手続きで和田山の法務局へ
・ハンザキ研ニュースNo.60（2010年12月号）刊行
- 27日 出石川放流ハンザキの死体搬入、上顎の吻部表皮欠如（古傷）
- 31日 -12℃を記録する、全て凍りつくハンザキの天国にて・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

今月はほとんど毎日の雪降り、積雪も1センチ近い状況だった。銀世界の景色は素晴らしい。各施設の駐車場には、街から雪遊びにやって来た子供たちが残した雪ダルマや“かまくら”が見られる。家族揃って楽しい一日を過ごしたのだろう。だが現実の雪国の住民にとっては大変に厳しいシーズンなのだ。家の前の雪を掻き退けて出入りができるようにするのは比較的楽なものだ。しかし、車の出入りや道路までの距離の長いお宅は大変だ。その上、除雪車が再々道路の雪を掻き分けてくれるので、通過したらすぐに掻き退けられた雪を除去しないと凍結したら大変だ。つるつるの地面になってしまい、靴の底が“ヌルッ”と不気味に滑る。スケーターたちはよくもあんなに動けるものだと感心させられる。前かがみになって一歩一歩確かめながらの歩行も楽ではない。

ツララが窓ガラスを突き破るなんて話は新鮮な驚きを感じるが、街の人たちには考えもつかない出来事だろう。ハンザキ保護センターの作業場の屋根に積もった雪がずってくる。そのまま落ちると防鳥ネットを破ってしまうので、大きなのこぎりで切り落としていた。60～70センチも伸びた雪庇は硬く凍り付いている。庇の際沿いに1センチほど切った時に落下した。足元の踏み板に落ちたがその衝撃でこちらが少々ながら飛び上がった。こんな塊が落ちてきたら死人が出るのも最もだと思う。車が凹んでしまったと言う話も届いた。滑べって肋骨を2本も折ってしまった方も出た。股裂き（片方の足だけ滑って）になるのも再々であるが、凍りつく冬の先にはコブシの蕾の膨らみが春のやってくることを思わせてくれる。

（本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。）